



「加古川の始まり？」

4月になり、新入生を迎え、新しい年度が始まりました。本年度も加古川北高校をよろしくお願ひします。「ぶらり加古川」も同様にご愛読のほどよろしくお願ひします。

さて、加古川北高校がある地域は、加古川の大なり小なりの影響を受け発展してきました。大げさですが、世界文明の発生地には大河が存在するように、文化の発生や経済の発展には川の存在は欠かせません。加古川においても例外ではありません。

加古川は「加古川」が瀬戸内海へと流れだす河口に、その土砂が堆積し沖積平野を形成しました。その加古川をはさんで、弥生時代前期西地域に米づくりが始まります。加古川西岸で最大の村落で、灌漑工事跡がみられるのが岸・

いさべ
砂部遺跡（西神吉町）です。



西地域の発展は、さらに内陸部の東中遺跡（志方町）へ展開します。

東地域の代表は溝之口遺跡（加古川町）です。1968(昭和 48)年加古川バイパス工事で発見された弥生時代前期から平安時代まで続く集落跡です。住居址、倉庫址、須恵器、風字硯、官人の礼服の腰帯、墨書土器、弓、齋串いくし(神を招くときの依代、神への供物、また災いを除ける祓いの道具)などが発見され、官衙や豪族の館の可能性も考えられています。東地域の北への展開は里池（神野町）周辺が考えられています。

加古川の地は、古代～現代まで謎多く興味を大いにそそられる地域でこれからの励みとなります。